

試合前のバッティング練習で外野に飛んだボールを回収する浜辺さん



そんなある日、地元の由宇町にプロ野球の練習場ができることが決まり、球場スタッフとして試合の準備などを手伝ってほしいとの依頼を持ち掛けられます。当時はまだ現役で働いていた浜辺さんでしたが、仕事がない日に手伝える範囲でと依頼を引き受けます。

その後、仕事を退職してからは本格的にスタッフと

広島東洋カープの2軍本拠地、由宇球場。その球場スタッフとして試合の円滑な進行をサポートしているのが、今年で80歳になった浜辺陸一さんです。浜辺さんが生まれたのは戦時中の昭和16年。小さい頃から活発で体を動かすことが好きだった浜辺さんが野球と出会ったのは小学生の時です。

「両親から、当時はぜいたく品だっ

た野球のグローブを買ってもらったことがうれしくて、毎日のように近所の広場で友達と野球をしていました」

高校卒業後、夢だった国鉄への就職を機に岩国に移住することになった浜辺さん。就職後も職場仲間と昼休みにソフトボールを楽しんだり、町内会の軟式野球チームに所属したりと野球と関わり続ける日々が続きます。

しての活動を始め、試合がある日はほぼ毎日球場に足を運びました。

「気付けばいつの間にかスタッフの中で私が最年長になっていました」

20年以上、球場に通い続ける中で、カープファンの常連客と顔なじみになり、選手からは「お父さん」と気さくに話し掛けられるようになります。

野球を愛するファンの人たちに楽しく観戦してもらい、またこの球場を訪れたいと思ってもらうことが自分の役目と話す浜辺さんですが、由宇球場では現在、感染症の拡大防止のため無観客試合が続いています。

「またいつの日か大勢の観客で溢れ返ったにぎやかな由宇球場が見られることを願っています。その日まで自分のできることをひたむきに続けていきたいです」

背筋を正してそう話す浜辺さんは今日も元気に白球を追いかけます。



鉄道の運転士になることが子供の頃からの夢だった



長年見てきた赤松選手（左端）の引退時に撮った思い出の写真（右端が浜辺さん）



白球を

追いかけて80年

Vol.146

りょういち
浜辺 陸一さん
(由宇町在住)

1941年、熊本県出身。高校卒業後、就職を機に岩国に移住。

1993年の由宇球場開場当時から現在まで、グラウンド整備や試合のボールボーイを行うなど球場運営をサポートしている。

